



TITLE:

商業生産説の諸性格(下) - アダム・スミスを中心としての一考案 -

AUTHOR(S):

松井, 清

CITATION:

松井, 清. 商業生産説の諸性格(下) - アダム・スミスを中心としての一考案 -. 経済論叢 1935, 41(2): 276-285

ISSUE DATE:

1935-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130616>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第

卷一十四第

行發日一月八年十和昭

論叢

生産の構造

文學博士 高田保馬

寺院と課税

法學博士 神戸正雄

第三世界觀的人格典型

文學博士 米田庄太郎

時論

最近に於ける産業組合金融の動向

經濟學博士 八木芳之助

研究

フランス帝國經濟會議

經濟學士 松岡孝兒

産業的流通に於ける營業貨幣の流通速度

經濟學士 中谷實

マリーカン時代^{テリズム}の海運政策の典型

經濟學士 明石嚴三

商業生産説の諸性格

經濟學士 松井清

說苑

希臘人の「植民」觀

農學士 若木禮

中小經營の彈力性に就いて

經濟學士 岡倉伯士

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

商業生産説の諸性格 (下)

——アダム・スミスを中心としての一考案——

松 井 清

四 生産的労働の素材的規定と商業の生産性

價值發生の基準を何に求めるかについてのスミスの見解は、生産的労働に關する彼の第二の規定を觀察することによつて明らかとなる。

『生産的労働はその労働の終つた後、尙ほ少くとも若干時間は保つ或る特定の目的物または賣り得べき財貨に固有し、且つ具體化される。此の目的物またはこの財貨は、言はば或る他の場合に、もし必要あらば、用ひらるべく積み貯へられる労働の或る一定量の様なものである。まことに伴の目的物若くはそれと同一物なる該目的物の價格は、最初にこれを生産した處のそれと等しい労働量を後にもし必要あらば動かし得るのである¹⁾』

『不生産的労働は何ら特定の目的物または賣り得べき財貨に固着若くは具體化されない。その勞務は大抵正に之を果すの瞬間に消滅して丁ひ、之に對して勞務の等量が後に得らるべき何等かの痕跡または價值をそのあとに残すこと稀である。』²⁾

こゝに賣り得べき財貨に固着し具體化されるとは、言葉を換へて云へば商品に固着し具體化されると云ふ事である。かくて生産的労働に關する第二の規定は、商品に固着し具體化する労働は生産的であり、然らざる労働は不生産的であると云ふことに歸着する。さきに觀察した生産的勞

1) Adam Smith: W. of N. Vol. I. p. 313.

2) Adam Smith: W. of N. Vol. I. p. 313.

働の第一の規定、即ち資本と交換されて利潤を生む労働は生産的であると云ふ規定に於ては、労働の内容または結果は何ら關係する所がなく、唯それが資本主義社會に於いて採る形態のみに關係してゐた。然るに商品に固着し具體化する労働と規定した場合、商品は交換價值と同時に使用價值を持つものであるから、労働はその内容結果即ちそのもつ素材的規定性が問題とさるに至つたと云ふことが出来る³⁾。しかもこの二規定は決して矛盾すべきものではないのであるから、資本主義社會に於てこの二規定が如何に統一されねばならぬかを決定することが理論的に要求される。

資本と交換され利潤を生む労働は生産的であると云ふ規定は、資本主義社會に於ける生産的な労働である。従つて此處ではあらゆる使用價值の生産が資本主義的に行はれる完全な資本主義的生産が前提されるわけである。さうした場合自家用の爲の生産即ち商品形態を採らざる客觀的使用價值の生産は、原則として最早存在し得ないものと云はねばならない。一家の收入と交換さるる奴婢の労働が、主人の使用するシャツやズボン(客觀的使用價值)を、生産すると云ふことは否定されて居るのである。客觀的使用價值は總て商品形態をとり、資本と交換さるゝ労働が生産することとなる。之に反し不生産的労働は、客觀的使用價值たらず従つて商品の形態を採り得ない使用價值の生産のみを行ふ。不生産的労働は、その機能する瞬間の主觀的使用價值の故にのみ買はれ必然に一家内の收入と交換さるゝこととなるのである。かくの如く資本主義が全生産を支配した

3) Edwin Cannan: *ibid.*, p. 18 に云ふ restriction to the material object (富を有形財に限定すること)はこの思想をなす。

場合に於ては、生産的労働に關しては形態的區別と同時に素材的區別が生じて來る、即ち資本と交換されて價值を生産する労働は同時に商品を生産するのである。價值の量的規定が社會的に決定されると同時にまた客觀的使用價值の限界も社會的生産に於て社會的に規定される。だからこそかゝる二規定は生産の社會化せる資本主義的生産に於て完全に自己を實現するのである。

スミスが生産的労働の素材を物的商品に限定せるは、客觀的使用價值が「物」を離れて考へられない限りに於て正しい考へを含むものと云はねばならない。⁴⁾（勿論物的商品と云ふ場合スミスの觀念には重農主義者から承け繼いだ感覺性を附着せしめては居るが。）

吾々はいま上述の如き價值概念に於て商業の生産性を考ふべき點に到達した。商品(客觀的使用價值)を生産する否やの點からすれば、商業は明らかに商品を生産しないから不生産的とされねばならないと思はれる。然らばスミスは何故に商業を生産的階級の内に數へたのであらうか。此處に於て注意すべきことは、スミスが必ずしも『商品を生産する』と云ふ文字を用ひず、『商品に固着し具體化する (fixed and realised)』と云ふ文字を用ひて居ることである。即ち農業および製造工業上の労働と商業上の労働との間には、前者は商品を生産し後者は單に之を賣買する點にその本質的な區別が存在するものであり、スミスは或る程度まで之を區別せるに拘らず、『商品に固着し具體化する』と云ふ曖昧な觀念に於て商業を生産的であるとしたのである。以下この點を手掛りとして考察を進めやう。スミスは謂ふ。『農業者、製造者、卸賣商人及び小賣商人の利潤は悉く、農業者及製造

4) 此處に商品としての労働力を如何に取扱ふべきかと云ふ問題が残るわけである。しかしそれは直接今私の取扱へる課題に關係が無いから一應除外する。

者の生産し、卸賣及小賣商人の賣買する財の價格より引出されるものである。』

この引用句に於ても、商業上の労働は資本と交換される事によつて利潤をもたらしけれども、元來この利潤は農業者および製造者の生産した財貨より引出されるものであるとされて居る。この意味に於ては商業は不生産的とされねばならぬ筈である。同様の思想は彼が固定資本と流動資本を論ずる章にも現はれて居る。本來固定資本と流動資本との區別は、生産資本自體に關する區別であるべきだが、スミスは流動資本なる名稱の下に生産部面に於てではなく、流通部面に機能する資本を理解して居る。而してその場合『流通資本の特質はそれが獨り流通即ち持主を變更する事によつてのみ所得を與へる點にある。』となし、かゝる流通資本の中に『商人の手許にあるあらゆる種類の食料品、原料、完成品並びに此等を最後に使用または消費する所の人々にこれを流通または分配するに必要な貨幣。』を屬せしめて居る。之に反し生産的資本は『流通せずして即ち持主を變更せずして所得または利潤を與へる。』ものである。かくの如くスミスは固有の意味に於ける生産資本から、明らかに流通資本を區別し、その中に商人資本を屬せしめて居たのである。右の如く生産的労働の生産する利潤が自らを具現する財貨は、農業者、製造業者が生産する所であり、商業は單に之を賣買することによつて所有するに止まるものであることは、スミス自身も明らかに之を指摘して居る。然るに『賣り得べき財貨に固着し具體化する』と云ふ表現は、この區別を少なからず曖昧なものたらしめる。何故なら商品を生産することも、之を賣買することも

- 5) Adam Smith: W. of N. Vol. I. p. 343.
- 6) Adam Smith: W. of N. Vol. I. p. 265.
- 7) Adam Smith: W. of N. Vol. I. p. 265.
- 8) Adam Smith: W. of N. Vol. I. p. 264.

感性上我々をして商品を對象とする勞働が、その商品に固着し具體化すると信ぜしめる點に於ては同様だからである。

前節に於て吾々はスミスが價值の生産部面と流通部面に關して明確な區別を設けず、その結果商人が現實上利潤を獲得してゐる現象にとらはれて、商人を生産的階級に數へ上げた事を知つた。同様にして商品の生産と商品の賣買とを區別し乍らも、その點を徹底せしめ得なかつた理論的不明確さが、商業を生産的部門に屬せしめたものと云ふべきであらう。

しかし乍らこのことを以てスミスが謂はゆる讓渡利潤觀や價值の主觀的發生に關する理論をもつて居たものと見ることは誤りである。スミスは利潤が決して賣買から生れるものでなく、生産部面に於ける勞働によつて生産されるものであると見て居たことは、屢々指摘される所であり、以上の考察も勿論そのことは認めた上でなされて居るのである。唯その點に於ける素朴さと不明確さが、スミスをして商業を生産的であると定義させたものと見なければならぬ。^(註)然るが故に後の古典派の一部の如く價值論に主觀的要素を附加することなく、スミスの客觀的な勞働價值説を忠實に貫徹せしむる場合に於ては、商業の生産性は結局理論的に否定されることとなる。何となればその場合商業が價值を生産するや否やは、客觀的使用價值を生産するや否やを基準として定められることとなり、商業は明らかにかゝるものを生じないからである。

【註】 古典學派に屬する人で價論に主觀的要素をとり入れる人にセイ・マカーロックがある、この場合には商業は論理的に矛盾

盾することなく生産的であると云はれるかに見える。セイの次の諸句を見よ。『予は何等かの效用を創造することは即ち富の創造であると云はんとす。蓋し是等の物の效用はその價値の第一の基礎たり而してその價値は富の第一の基礎たるを以てなり。』⁹⁾

『生産は物質の創造ではなく效用の創造である。』¹⁰⁾

『産業が吾人の圏内に在らざる欲望対象物を吾人の圏内にもたらし場合には之を商産業または單に商業と名づく。』¹¹⁾

この場合は價值生産の基準は效用の生産に關して求められ商業は人の物に對する主觀的效用を増加する故に、論理的には誤りなく商業を生産的と云ひ得るのである。かくてセイはその三分説(生産・分配・消費)に於て商業を生産の内に論じて居る。セイの影響を受けたマカローツクに於ても同様である。

『經濟學に於て我々は生産なる語を物財の生産には解せずして效用の生産即ち交換價値の生産に解する。』¹²⁾
かくてマカローツクもまた商業を生産的であるとするのである。

しかし乍ら效用なる主觀的要素を經濟學上にとり入れることが果して正しいか否かは問題であつて批判の多く存する所である。

五 商業生産説のイデオロギ―

商業の生産性の問題は既に指摘せる如く、生産過程自體に關する問題であつて、商業が價値を生産するや否やとして定立されねばならぬ。従つて商業資本が流通過程をも含んだ總生産過程に於て利潤の分配に與ると云ふことは、何ら商業を生産的であるとなす根據とはならないのである。

然るにアダム・スミスは、生産過程と流通過程、従つて價値と利潤との混同の故に、客觀的價

9) J. B. Say: *Traité d'économie politique* (1841) p. 57. 増井幸雄氏邦譯 111頁
10) J. B. Say: *ibid.*, p. 58. 増井幸雄氏邦譯 112頁
11) J. B. Say: *ibid.*, p. 59. 増井氏邦譯 116頁
12) Mac Culloch: *The principles of political economy* 4th ed. p. 61.

値説をとり乍ら商業を生産的となしたことは以上觀察し來れる如くである。而してスミスの客觀的價值説を以て貫徹する場合に於ては、それは既に賣買利潤觀や主觀的價值説を排斥することを意味してゐるのであるから、商業の生産性は結局否定されねばならぬこともまた同時に知り得た所である。

以上問題を理論的に定立し考察したのである。しかし乍ら一般に商業を生産的であるとなす場合は、必ずしもかくの如き嚴密なる理論的根據の上になされてはゐない。單に商業が資本主義的國民經濟に於て持つ有用性の故を以て、商業を生産的であるとなす見地が屢々存在することは注意せらるべきである。それはイデオロギーとしての商業生産説である。

資本主義的經濟學の鼻祖であり、從つて商工業者のイデオログであると云はれるスミスが、商業の資本主義社會に於てもつ經濟的機能の有用性を肯定し強調せることは論を俟たない。此處にスミスの有名な句を引用しやう。

『一たん分業が全く確立した曉には、自己の勞働所産の充足し得る處は、人の欲望の極めて一小部分に過ぎない。人は己の勞働所産の中、自己の消費に供して尙餘りある剩餘分を、他人の勞働所産の中自れが必要とする様な部分と交換して其の欲望の遙かに大なる部分を満たす。かくて各人悉く交換に依つて生活する。乃ち幾分か商人となる。而して其社會その者は正しく一個の商業社會と化するのである。¹⁾』

『商業社會』なる名稱を以て特色づけられる商品生産社會に於ては、まことにスミスの云ふ如く人間的欲望は悉く交換によつて充足されねばならない。かくてのみ使用價值は交換價值の形態

1) Adam Smith: W. of N. Vol. I. p. 24.

を採る。人々の生産行爲は交換によつてのみ可能となり、従つて交換の媒介者たる商業は、商品生産社會に於ける經濟生活にとつて、一の必然的な範疇となり、その限りに於て生産的様相を呈すると云へやう。更らにまたスミスは他の個所に於て、『もし商業が存在しないならば』、と云ふ假定を置くことによつて、商業が諸生産資本間の分業を媒介することによつて、如何に一國の生産力の増進に貢獻するか、また諸生産資本の市場を擴大し、回轉率を迅速ならしむることによつて、如何にその利潤率を増進せしむるかについて論じて居る。²⁾

成程私的分業と従つて交換原則に立脚した『商業社會』にとつては、商業の機能は有用であると云はねばならぬ。しかし乍らスミスが商業のかゝる有用性を以て、商業を生産的であるとしたものとすれば、それは明らかに彼の生産概念に背離する。何故ならば既に述べた所によつて、客觀的價值論を以て貫徹せんとする場合、結局商業の生産性は否定されねばならぬ事は明らかだからである。

我々は茲に於て商業生産説のイデオロギーが理論的には何らかの非物質的無形的生産概念 (Produktivitätsbegriffes mit immateriellen Zielen) に結びつかねばならぬ事を知るのである。事實ドイツの資本主義に併行して發生し發展した歴史主義的國民經濟學に於て唱へられる商業生産説は、彼等の非物質的な生産概念と密接に結び附いて居たのである。それに關してリストの次の言葉は注意すべきである。

2) Adam Smith: W. of N. Vol. I. p. 341.
3) Adam Smith: W. of N. Vol. I. p. 341.
4) Walter Weddigen: a. a. O. S. 487.

『萬民經濟學と國民經濟學とが存在する。前者は交換價値の理論であり、後者は生産力の理論である。』⁵⁾ 彼等は古典派によつて主張される交換價値學説の生産概念に附着する物質主義に強く反撥し、無形的な國民的生産力を以て自らの生産概念の基準となし來る。

この場合に於ては商業の生産性の問題は商業が價値を生産するものなりや否やとしてではなく、商業が一國の國民的生産力にとつて有用なものなりや否やとして定立される。而して之は商業の國民經濟的生産性 (Volkswirtschaftliche Produktivität des Handels) と呼ばれるのである。今日商業政策學 (Handelspolitik) として一分派をなすボークト・ゲルンチエルの先驅者であつたロツシャアの如きが、見る見地に於て商業生産性を論ぜるものと思はれる。かゝる立場に於ては當然商業は生産的なものとなり、商業生産説は形式論理的に矛盾なく主張され得る。

しかし乍ら非物質的無形生産概念が、嚴密な科學的意義に於て正しいものであるや否やは、今日大體批判され盡して居ると云つて差支へあるまい。従つて商業生産説のイデオロギーが無形生産概念をとることによつてたとひ形式論理的矛盾が救はれたとしても、その理論的根據たる無形生産概念が科學的に無意義である以上問題にならないと云はねばならぬ。唯ここでは無形的生産概念と商業生産説の必然的な結びつき、及びさう云つた説の生れる歴史的地盤のみが問題になるのである。

六 結 論

内國商業が著しい勢で勃興しつつあり、あたかも産業革命の前夜にあつた一七六〇年代の英國を思へば、¹⁾ スミスの商業生産説はイデオロギー的には必然的な歴史的地盤を持つものと云ふ事が出来る。しかし乍らスミスの客觀的價値概念を以て貫徹せんとする場合、商業生産説は理論的

5) Friedrich List: a. a. O. S. 225.

6) Wilhelm Roscher: Nationalökonomik des Handels und Gewerbelebens S. 128.

1) Arnold Toynbee: Lectures of the industry revolution of the eighteenth century in England, p. 51.

には否定されねばならない。これが以上の考察によつて得た私の結論である。

最後に以上なされた考察に對して當然起るべき二三の疑問について一言しておきたい。商業の生産性を否定することは、同時に流通の生産性の否定を意味する。従つてその場合には當然流通に機能する商業以外の業務たる運輸保管業務を如何に取扱ふべきかの疑問が生じて來るわけである。更らにまた商業の生産性を否定する場合には、現實に商業が獲得しつゝある利潤に對し一定の特殊規定を伴はねばならない。之等の問題を私は今後の研究に俟ちたいと思つて居る。

最近では商業の生産性の問題を單なる言葉の爭、立場の相異として無視し去らうとする傾向が現はれてゐる。そしてかゝる議論は全部ではないにしても屢々價值論自體をすら否定し去らうとする理論と一脈の聯關を持つてゐる。かう云つた説の詳細な批判はこゝでの問題でないけれども之だけのことは指摘しておく必要があらう。即ち經濟學の長い歴史が持つた價值論を否定するところが既に重大な問題であるし、又正しい價值論は一應抽象的な法則性に迄高められてはゐるが、その抽象は社會的行程によつてなざるゝものであつて、謂はるゝ如く決して現實から遊離したものではあり得ない。従つて價值論と密接に結びつく商業の生産性の問題も、リアルな存在から離れて考へ得るものでなく、その限りに於て立場の相異となすことは當を得てゐないものと考へられる。現に高度資本主義の今日に於て支配的な現象たる商業排除の傾向の如き、²⁾現實自體が商業の生産性を否定しつゝある一證左とも云へよう、(完)

2) 商業排除傾向の現存することは Der moderne Kapitalismus の著者ゾンバルト Das Finanzkapital の著者ヒルファア・ディング等相等しく之を認めてゐる。